

# 地域における年中行事と子ども達の参加の変遷に関する研究

—少子高齢化時代を見据えた子どもが参加する地域づくり—

上原 貴夫

## はじめに

現代においては地域が崩壊する、あるいは集落が維持できないといったことを聞く。この直接的な原因としては過疎化や高齢化がある。このような地域では地域の担い手そのものが減少してきているという深刻な問題がある。加えて、多くの場合このような地域では同時に少子化が進行している。

一般に地域には子ども達もいて、その子ども達も何らかの役割を担うという立場にあった。それは、仕事や家事のお手伝いなどとして行なわれるものもあったが、多くの場合は獅子舞や道祖神など今では伝統行事といわれるような年中行事であった。年中行事では子ども達は行事によっては例えば神の象徴などとして参加し、豊作や成長の願いを託すものとしての役割などを担っていた。

子ども達と地域とのかかわりは、このような行事を通したかかわりだけでなく、直接的に生活にかかわることも行われていた。道そうじや川そうじ、冬になって行われる「火の番」(防火のための夜廻り)などは子ども達でも行うことが出来る活動として地域で実行されていた。

これらの活動は地域にとって重要な意味を持ち、実質的な役割の遂行となっていた。同時に、子ども達はこれらを通して地域に迎え入れられ、地域のメンバー(成員)として、役割を担い、成長していた。

現代においては、地域と子ども達とのこのようなかかわりは消えたのか。あるいは姿を変えて続けられているのか。また、これらの活動を通して子ども達は何を得て、どのように成長していたのか。

現在、少子高齢化が急速な勢いで進行している。このまま進行した場合、地域を維持する上で必要とされる人員の確保も危うい状態となることが予想される。そのため、今後、子ども達も、また高齢者も共に参画する地域形成が求められる。

現代の時代における子どもと地域とのかかわりについて、年中行事を通して考えて

みたい。

## 1. 地域における子ども

### (1) 地域が育む子どもの成長

子ども達は地域においてさまざまな経験を積む。そこで成長に役立つ多くのことを学んでいく。それは子どもとおしの集団を通して得られることもあり、家族でもある。また地域の年配者など大人との交わりを通して得られていく。そこでは地域の生活に必要な知識や技術であり、また地域社会における人との交流や人に接する際の態度や礼儀、言葉や作法などさまざまな内容に渡る。

地域によっては通過儀礼的に営まれている行事を通して大人としての自覚をうながしていくものもある。ここで取りあげる地域では節分の豆まきがある。節分の豆まきは年男、年女が豆を播く習わしであるが、これはこの地区においても同様である。この地区では、ここで豆を播くことで自分の歳を自覚すると共に、地区での役割や立場を自他共に認識することになる。例えば二度目の豆まきであるからそろそろ結婚の時期であるとか、あるいは六回目、七回目であるから老人クラブに入る頃などといったことが認識されていく。周囲の者もこれによって年配格の人に対する向き合い方、接し方などとして臨む心構えや姿勢・態度を整えていく。

これは大人期になって一度期に形成されるものではなく、子どもの頃から生活や行動を共にすることを通して芽生えていく。直接的に教えられる機会があるというわけではないが、生活の中で伝えられ、習得されていく。これを通して社会性や協調性などを得ていくが、同時に地域におけるメンバー(成員)として求められる資質を形成していく。

### (2) 子ども達がいて地域形成が出来る

地域において子ども達が持つ意義としては大きく二通りある。一つは地域における実際上の生活における役割分担として示されるものである。他の一つは次代を継承していく成員としての意味である。

前者は、子ども達は時に年中行事の担い手であり、また、家庭の手伝いや共同作業への参加を通して地域形成に参画するものである。地域の生活は住民の協力を中心として形成されていた。農村部であれば圃場の用水路の草刈りや堰さらい(用水路の清掃)などは住民が協力し合う共同作業として行われている。生活用の道路の手入れも同様である。これらは通常、各戸から一人が参加して行われる。このような場合、軽作業である場合は中学生などある程度、作業に加わることが出来る年齢であれば一人

前の役割として認められた。たとえ成人に達していなくとも住民としての責任を果たすことが認められたのである。

後者は、子ども達は地域のメンバー(成員)であり、地域を受け継ぐ成員であるというこの意味を持っている。地域も次代に受け継がれていくものである。そのためには成員が継承されることが必要である。子ども達は次代の成員として位置づけられる。

子ども達が成員として位置づけられるためにはその子ども独自の個性的成長だけでなく、地域を担う上で求められる資質を形成することが必要である。それはその地域における生活上の知識や技術であるばかりでなく、地域特有の生活習慣や風習、文化などであり、また地域における集団意識、共同体意識なども含まれるものである。

これらは年配者から直接伝えられることもあるが、生活を通して受け継がれていく。地域の協同作業や共同の行動、生活実現、周囲の人々との交わりなどを通して形成されていく。

## 2. 現代における子どもと地域生活

### (1) 主体的実施者から、お手伝い者、間接的な実施者へ

現代では子ども達と地域との間に形成されるかわりは希薄であるといえる。なにより量的にそのような機会が減少している。また、内容としても子ども達からは主体的なかかわりが薄れてきている。

行事において子ども達は主体的に担う立場にもいたし、あるいは少なくともその一部をお手伝いする場合がほとんどであった。正月の伝統的な行事である獅子舞は子ども達自身が行うものであった。獅子舞では家々を回ると共に、縁起物のお札を手渡してくる。お賽銭もいただいでくる。これらの一連の活動であるが、本来はこれらの全ては子ども達が自ら行うものであった。獅子を舞うことそのものはもちろん子ども達の役割であるが、その際に配布されるお札の印刷から、賽銭の受け渡し、またその賽銭を分配するのも子ども達自身が行った。これらは一貫して子ども達の役割で実行されていた。

### (2) 参加の機会の減少

#### 1) 量的な減少

子ども達が地域の行事や活動に加わる機会はかなり減少してきている。共同作業についてはほとんど行われなくなってきている。これには時代の変化もある。道路の補修や用水の修理・点検などは多くの場合は行政が担うようになってきている。また、

機械化が進んで来ている。業者が施行する場合もある。そのため、そのやり方も従来とは異なってきている。子どもがたとえ大人の代わりであっても参加しなくなっているのが実状である。

年中行事であっても、実施そのものが少なくなっている。行事によっては途絶えるものもあらわれている。なかには簡略化されるものもある。さらに、担い手がいなくなるという場合もある。これまでは地域が都市化したり、あるいは勤務者が増えるにしたがって担い手が減少してきた。現在では高齢化や少子化、人口減少などの進行によって行事を維持できなくなる地域もあらわれている。

自ずと子ども達が参加できる行事は減少してくる。

## 2) 分担的な参加者へ

参加する際のかかわり方においても変化が見られる。子ども達の立場は従来に比べて指示される側、あるいは役割の一部を果たす立場に変容している。子ども達は大人が企画し、準備した事業において、大人からの指示を受けて、指示された中でその一部を実行する立場に変容している。獅子舞と道祖神の馬引きについて示す。

獅子舞では既に述べた昔の獅子舞のように、企画し、準備し、実施して、その最終的な始末まで行うという一連の活動からは遠い状態である。獅子舞においても、子ども達は多くの場合、舞うことと、舞の際のお囃子を歌うことに限定されている。守札の印刷や受け渡しも、拝札、賽銭の受け取り、分配、保管なども大人の指導に従う立場として行動している。そのかかわりは従来に比べて主体的なかかわりが少なくなってきたといえる。

「道祖神の馬引き」は道祖神の祭として子ども達が1年間の無事と成長を祈願して地区にある祠にお参りをする。その際、集落の中を行列をつくり、稲ワラでつくられた馬を引いていく。道中ではお札と餅を配る。守札と餅を受けた家では賽銭をあげる。子ども達は道祖神の歌を歌いながら、馬を引いて練り歩く。

表-1 子ども達の参加状況の変遷(獅子舞)

役	守札の印刷	守札の配布	舞	お囃子歌・鈴	賽銭の受け取り	賽銭の保管	賽銭の分配
従来	子ども	子ども	子ども	子ども	子ども	子ども	子ども
現在	大人	大人	子ども	子ども	大人	大人	大人

表－２ 子ども達の参加状況の変遷(道祖神)

役	守札の印刷	守札の配布	馬引き	歌	わら馬の作製	賽銭の受渡し
従来	子ども	子ども	子ども	子ども	大人	子ども
現在	大人	大人	子ども	子ども	大人	大人

### 3)子ども達にあらわれている変化

子ども達においても変化があらわれている。1つは、人数の減少である。これは少子化の影響を直接的に受けている。2つ目は生活時間の変化である。1日の大部分を学校で過ごす。家庭にもどってから塾や家庭教師などのもとで学ぶ子ども達も多い。また、土・日曜日は地区のスポーツやレクリエーションなどに参加するなどのケースが多くなっている。3つ目は、仲間関係の変化である。第一に全体に仲間の人数が少なくなっていることがある。地域によって偏りはあるが、少子化などにより地域における子ども達の人数が減少してきている。次に集団の関係の変化である。従来は地域における子ども達の関係は異年齢が交わる集団であり、なかには当然年長者もいるし、また自分よりも年齢が低い仲間もいた。自分自身がリーダー的に行動することもあり、また反対に従う行動の場合もあった。これらは行事など統一した行動が求められる場合には、集団をまとめる役割や係を遂行する役割において効果的な構成となっていた。現代では、地域においてもこのような関係はなかなか形成されなくなっている。

### 4)行事の実施者として大人の参加の度合いが高まる時代

量として、またかかわり方の大きさとしても大人のかかわりが増大してきている。この傾向は子ども達にとっては少子化であり、かたや長寿化とともに、元気な高齢者が多くなる健康年齢の延長によってより一層進行すると考えられる。

人数としても、また内容としても大人の側の参加の度合いが増えている。多くの高齢者が高齢期になって地域に参加する機会が維持されていることは歓迎すべきことであるが、同時に子ども達の参加とのバランスが重要である。

表－3 ある地区の獅子舞の参加者の年齢段階構成

子ども	就学前	小学生	中学生	合計
	2	19	1	22
大人	(役員、保護者、一般含む)			25

### (3)子どもの地域における位置づけが希薄化する現代

現代の生活における大きな変化として「職住の分離」があるといえる。私たちの生活においては都市化の進行や、それにとまなう生活の個別化などさまざまな変化が進行してきた。なかでも、身近に暮らす地域生活における変化をうながす理由として「職住の分離」があるといえる。

かつて農村地帯に典型的に見られるように職業、いわば仕事と生活は同一の場所にあった。しかし、現代では生活の糧となる職業は日常暮らす場所とは多くの場合異なる。多くの人は生活地域から出て職場へ向かう。仕事が終わった後に家にもどる、生活地域にもどるといった生活である。

このことは大人の生活を変えるだけでなく、子ども達の暮らしや成長も変えることになった。このことは必然的に地域外に対する依存を深めることとなる。結果として、生活においても地域にとどまることが少なくなり、そのために地域の活動へ参加する時間も機会も減少する。これにより、地域の行事や活動へ参加する人員や時間の確保が困難となる。

子ども達の生活時間も塾や家庭教師、おけいこなどに割かれる時間が増大している。そのため、地域における行事や活動の機会も減少してきている。これらによって地域の住民による子ども達に対するとらえ方も変化し、行事や活動を全面的に担う者という認識から部分的な参加者へと変わってくるのが実状である。

## 3. 地域において子どもが果たす役割

### (1)子どもの地域参加

子ども自身も地域の担い手であった。それは行事の担い手であり、また、家庭の手伝いを通して地域の機能を果たしていた。行事では後述するような年中行事があった。獅子舞やどんど焼きなどのように、なかには子ども自身が企画し、実施するものがあり、それが1年の節目となるものであった。子ども達の行事によって地域の生活が節

目を得ていた。

家庭の手伝いは家事などはもちろん、それだけでなく子育ても子どもの仕事であった。子ども達が兄弟・姉妹の子守をしていた。また、田畑の手伝いや家畜の飼育を手伝うなどは農業などの生産活動でもあった。その場合は、子どもであっても一人前の



photo-1道祖神



photo-2 夏の打ち水。大人と一緒に。

働き手であった。

具体的に子ども達の役割とされてきたものもあった。戦後の間もないころ、小学生が「道そうじ」(道路の清掃)をしていた。これは日曜日の早朝に小学校3年生から6年生までの子ども達が行うものであった。冬季には日の出も遅くなるために休んでいたが年間を通して行われていた。現在は行われていない。

## (2)子どもと年中行事

### 1)地区の概要

長野県M町におけるある地域の年中行事を示す。

対象地区の属性

戸数と人口等：111戸ほどであり、人口は300人ぐらいである。

高齢化もあまり進んでいない。

歴史：地区の街割りについて天正16年(1588)に記された「まち割控え」が伝えられている。

全体的な景観として対象地域は農村風景の残る地域である。江戸時代の街道に面した地域であり、地区には当時の面影を伝える本陣や問屋などの建物、用水路や宿場特有の枡形、街道の遺構などが残っている。寺や神社を中心とした年中行事や生活上伝

承された行事なども多い。

地区の維持はいわゆる村役といった「役」によって担われている。それらは最も身近な役割として生活に直結するものであり、また行政の一端を担う面も持つが同時に地域独特の役割活動として地域を担うという特徴もある。役割の数は多くあるため、どの家でも何かの役を担当している。区長、副区長、会計などの三役の他に、農事、水路の管理など生活に直結した役もある。民生委員、農業委員、統計委員などのように行政につながる役もある。学校のPTAなどの役も含めるとかなりの数の役となる。

この地域独特な役として年中行事に関係した役がある。一つは道祖神保存会であり、会長、副会長、会計、顧問などの役がある。他の一つとして「祭事」係がある。これは、各班に1名～2名が割り当てられている。全員で13名いる。地区の春と秋の村祭りや節分、道祖神などの行事の時に準備を担当する役である。四季折々に年間を通じて活動が行なわれている。

#### 対象地区の主な村役(係)

区長 副区長 会計 社協会長(地区社会福祉協議会長) 分館長(地区公民館長)

区財産管理委員長 区財産管理員 会計監事 班長(第1班から9班。班長会長)

農業委員 民生委員 水利委員 財産区委員 環境美化委員 共済委員 保健補導員 防犯指導員 安全協会 統計調査員 など

この他に、小・中学校PTA、農業協同組合、老人クラブなどの係がある。

#### 2)年中行事

長野県M町における年中行事を示す。該当地区では伝統的な行事ばかりでなく相互扶助としての共同作業も行われている。この作業に参加するのは大人であるが、中学生になっていれば参加する場合もある。そのためこの行事も子どもの参加の中に入れた。全国的な歳時記はこの地域特有のものではないが、実施されているものについては列を変えて示した。

表-2 長野県M町の地域における主な年中行事・歳時記

時期	地区の年中行事	歳時記
1月	正月 2日獅子舞 15日 ものづくり(繭玉づくり) どんど焼き 19日 十九夜念仏 20日 山の神	正月
2月	3日 節分 道祖神(馬引き)	初午



3月	3日 ひな祭り 春の祭	ひな祭り
4月	地区の助郷(相互扶助=共同作業。道路の手入れ)	
5月	地区対抗野球大会 少年野球 青葉祭り(地区のお寺の祭り)	端午の節句 中旬から田植え
6月	地区の助郷(相互扶助=共同作業) 農休み	
7月	町のお祭り 地区の助郷(相互扶助=共同作業。水路の草刈り)	七夕
8月	宿場祭り(この地域は、江戸時代からの街道の宿場であった) 地区対抗盆野球	盆
9月	地区の助郷(地域扶助=共同作業。水路の草刈り) 地区の助郷(地域扶助=共同作業。道路の清掃など手入れ) 秋の祭	稲刈り
10月	町民運動会	
11月	十日夜(とおかんや) えびす講(冬の準備)	
12月	年越し準備 二年参り	

#### 4. 展望

現在、地域生活において共同で行う活動そのものが減少している。地域における生産活動においても個別に実行する状況となっている。地域に住民が協力して行う状況は少ない。また、冠婚葬祭の例に端的にあらわれているように、住民どおしが協力して執り行うというよりも業者が参入する時代となっている。

年中行事は季節の節目や人生の段階を示すものとなっていたが、場合によっては負担の多い事業となっている。

年中行事は大人と子ども達が交わる貴重な機会となっていた。また、子ども達にとっては共同体意識や仲間意識、協力や協調性の涵養、生活における実際上の知識や技術の伝承の場となっていたが、その貴重な機会を失うことになる。

特に、地域におけるこのような活動は子ども達が自己の地域における役割や位置づけを認識する機会となっている。しかも、従来は子ども達が主体的に運営してきた。現在はそのような機会が減少するとともに、数少ない行事も大人が多く部分を運営するスタイルとなっている。このことは、子どもにとって、成長の上で必要な体験が

希薄化することになっている。同時に、特に主体的な体験を得る機会を失う状況となっている。

地域にとって、地域に求められる成員(メンバー)の育成の機会を失う。このことは地域に暮らす各家庭が個別化するとともに、住民どおしのつながりを希薄化させ、住民一人ひとりが地域から孤立化することにもつながりかねない。

年中行事が地域において果たす意義は、地域の文化の維持継承であるだけでなく地域のつながり、地域生活の実現をはたす面を持っている。これらに加えて子ども達自身の成長やその子ども達が成員として成長していく機能も備えている。そのため、この面からも改めて認識する必要がある。